第8回建築コンクール
時間の建築 シンポジウム／受賞作品

公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部主催

第8回 建築コンクール シンポジウム

シンポジウムパネラー／審査員

伊礼智 建築家

琉球大学理工学部卒業。東京藝術大学美術学部建築科大学院修了。丸谷博男+エーアンドエーを経て、1996年伊礼智設計室設立。2004年「東京町家」を東京の工務店3社と展開。2006年「9坪の家」、2007年「町角の家」でエコビルド賞受賞。著書に「伊礼智の住宅設計作法」（新建新聞社、アース工房）、「伊礼智の住宅設計」（エクスナレッジ）などがある。

中村好文 建築家

武蔵野美術大学建築学科卒業。1972年宍道建築設計事務所。1975年東京都立品川職業訓練校木工科。1976年吉村順三設計事務所。1981年レミングハウス設立。1987年第1回吉岡賞受賞。1993年第18回吉田五十八賞特別賞受賞。日本大学生産工学部建築工学科教授。
著書に「住宅巡礼」（新潮社）、「普段着の住宅術」（王国社）、「住宅読本」（新潮社）などがある。

栗生明 建築家

早稲田大学大学院理工学部研究科修士課程修了。1973年（株）槇総合計画事務所。1979年（株）都市建築設計事務所Kアトリエ設立。1987年（株）栗生総合計画事務所。1996年日本建築学会賞作品賞受賞。1999年ケネス・F・ブラウン・アジア太平洋建築デザイン賞受賞。2002年第43回建築業協会賞(BCS賞)受賞。2003年日本芸術院賞受賞。2005年第8回アルカシア建築賞ゴールドメダル受賞。2010年第12回公共建築賞受賞。

古谷誠章 建築家

早稲田大学大学院博士前期課程修了。1994年八木佐千子と共同してNASCA設立。2001年有限会社ナスカー級建築士事務所。1991年第8回吉岡賞受賞。1999年日本建築家協会新人賞受賞。2007日本建築学会賞作品賞受賞。2007年日本建築家協会賞受賞。2011年日本芸術院賞受賞。早稲田大学教授。著書に「shuffled-古谷誠章の建築ノート」（TOTO出版）「がらんどう」（王国社）「マドの思想」（彰国社）「建築家っておもしろい」（文屋）などがある。

江尻憲泰 構造家

千葉大学大学院工学研究科修士課程修了。1988年有限会社青木繁研究室。1996年有限会社江尻建築構造設計事務所設立。
2010年日本構造デザイン賞受賞。　2013年第14回日本免震構造協会作品賞受賞。
長岡造形大学教授。

審査員のあいさつ

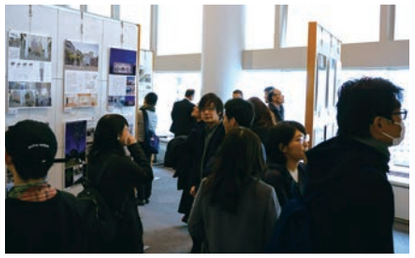
中村　今回はぶっつけ本番なので、どうなるか楽しみにしています。

伊礼　中村さんがおっしゃったようにぶっつけ本番なので作品を十分読み込めていないかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

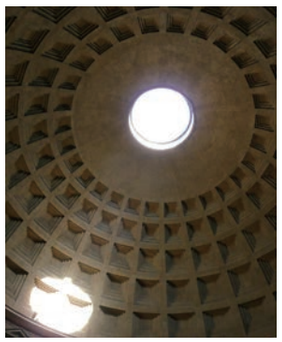
江尻　デザイン関係の方が多く来場されていると思いますが、この中に構造や施工に携わっている方がいらっしゃればぜひアピールしてください。

栗生　シンポジウムと公開審査が同日開催ですので、前半のシンポジウムで言っていることと、後半の公開審査で言っていることが真逆になるかもしれませんが、まあ、そのときはそのときで楽しくやりましょう。

古谷　いつもの回ですと、三か月前に早稲田大学でテーマの解説を兼ねたシンポジウムを行い、公開審査の前には応募作品をひと通り見て予習する時間をいただいてるんですが、今回はそれがなくって審査員のみなさんは少しドキドキしているわけです。また、例年ですとシンポジウムの発表の中で他の審査員がどんなことを言うのか、いちおう手の内がわかるのですが今回はそれもわからない。シンポジウムでは私が司会を任されるのですが、司会者としても何の情報も入っていませんので、まったくアドリブの笑点みたいな感じになっちゃうかもしれません（笑）。どういうことになるかまったく予想がつきませんけれども、どうぞよろしくお願いいたします。



パネラー01 | 伊礼智 建築家



I-1 時が動く

時が動くということで「日時計」これは王道ですよね。日時計を感じる建築のなかでもパンテオンというのは圧倒的に空間と光が立体になっていて、すごい魅力があると思っています。真っ先に思い浮かんだものがパンテオンなんです。日時計の要素や切り口を持ったものもので建築として優れているものが出てくるかなと思い取り上げました。

Ⅰ-2 時が漏れる

ソウルの古宮博物館にある水時計です。水時計のことを漏刻ともいい、時が漏れると書きます。水が漏れるのに比例して時間も変化していきます。水を使って時間を感じるというところがいいです。

これは1400年ぐらい前のものだそうですが、水時計とともに鐘を鳴らすという仕掛けがあります。大きなカラクリ建築のようになっているところがおもしろいなと思って取り上げました。

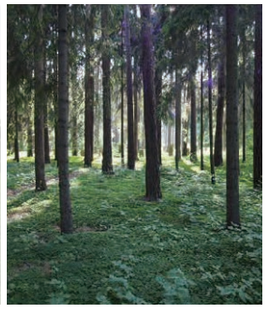
Ⅰ-3 時を集める

これはエチオピアだったと思います。イタリアの建築家集団ワルカウォーターが考案したものです。飲み水を集めるためのものです。上部の布に結露水を発生させて一番下のタンクにその水を貯めるようになっています。

構造は竹でできていて、そこに布を張っています。風にあおられると弱いのではないかと思いましたが、なかなかおもしろいなと思い取り上げました。

Ⅰ-4 時を繋ぐ

朝鮮王朝の宗廟（そうびょう）という皇室の位牌を安置する建物です。位牌が増えていくにしたがって建物を増築をしているんですけれども、それが建築としてもすごく魅力があります。時間（時代）のつながりを感じるような建築でした。



Ⅰ-5 時を留める

森の墓地ですね。ここへ行くと時間が止まって感じます。お墓があってすごい静寂感があって、いつ行っても変わらないんじゃないかって。そういう建築だなというように思います。

パネラー02 | 中村好文 建築家

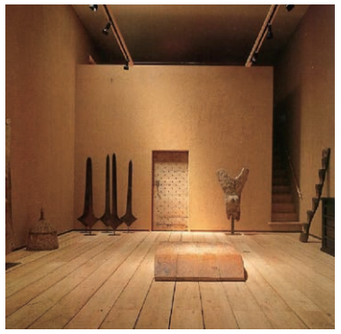
Ⅱ-1 重なる時間の建築

古い時間と新しい時間が重なる。過去と現在、そして未来につながっていくという意味です。

そういう意味で一番優れていると思うのがカルロ・スカルパですね。代表作のカステルヴェッキオは、古いお城をミュージアムに改修した優れた作品だと思います。古い建築物の魅力と新しいものを突き合わせ、異なる時間どうしを並列させたり、ぶつけたりすることで新しい価値観を生み出している建築です。それが見事なので選びました。

上の写真は外観ですが、アーチ型の開口から四角い建物が突き出しています。突き出した部分が新しい部分ですね。

下の写真は建物の一番端っこの部分で、時間の重ね方が一番おもしろい部分です。カングランデ1世の騎馬像をコンクリート打ち放しの架台で支え、屋根を鉄骨で支えたり、トラス状にしたり、そしてその上に古い瓦が乗っかる。そういうふうに時間が上手に重ね合わされて、次の時代への時間を生み出していると思います。



Ⅱ-2 尺度としての時間の建築

例えば、ミース・ファン・デル・ローエは素材を選ぶときに、古びたときに美しくなるようにしたいと言っていたらしい。確かに建築を見に行くと、ブロンズであり、石であり、皮であり、木であり、彼が使った素材というのは、時間の経過に耐えることができる。時間が経てば経つほど風合いが増すと言うんでしょうか、経年したときに魅力が増していくような素材でできているような気がします。だから彼は時間というものを素材の良し悪しを決める尺度として考えたんだと思います。

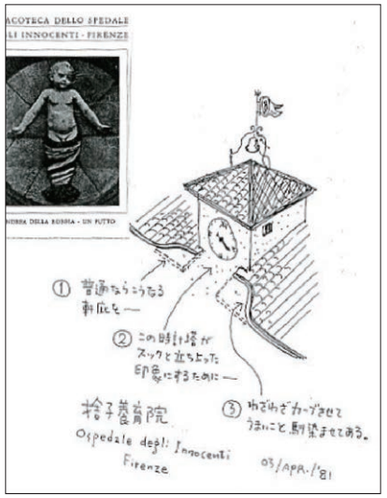
美しく古びる素材というのもあるし、美しく朽ちていく素材、朽ちた時に美しい素材、というのもある。そういうものを写真で見ていきたいと思います。

これは私が設計した「as it is」という千葉にある個人美術館です。これをつくる時に、時間が経つほどに味わいの増す素材を使いたいと思い、土壁だったり、木の床だったり、錆びていく鉄だったり、というふうにしました。またさらに、朽ちていく時に美しくなる素材、朽ちていく朽ち方が美しいものにしたいなと考えてつくりました。

Ⅱ-3 気になる時間の建築

これは本当は“時間の気になる建築”と言ってもいいと思うのですが、学校や銀行、駅などがそうです。最近は建物に時計をつけることをあまりしませんが、割と昔は建築に時計がついていました。そして、もうひとつが保育園です。ひたむきな感じのする建築です。共働き家庭などで保育園に子どもを預けている方は、朝夕の時間を気にしながら送り迎えをしています。時計がついていてほしい建築の一番トップにあっていいのではないかと思います。

写真はフィレンツェにある古い保育園です。捨子養育院というブルネレスキ設計の建物です。ファサードのロッジア（柱廊）が有名ですが、それをくぐり



抜けたところに見上げると時計の塔があって、今はそこがそのまま保育園になっています。子どもを送り迎えに来たお父さんやお母さんは、ここを通る時にチラッと時計を見上げるんですね。だから時計が彼らにとってどれほど大切なものであるか、生活と密着したものであるかがわかります。

もうひとつの写真は、「時間の建築」とは関係ないのですが、気づいたことを少しお話しします。屋根から突き出た時計の塔と軒庇の関係ですが、ふつう軒庇は点線のように四角くなるわけですが、それだと塔の壁が立ち上る連続性が失われてしまいます。ですからここをヘロリと曲げて塔の存在を際立たせています。1450年ぐらいの建物でも、現代の我々が考えていることも、似たようなことなんだなと思いました。

Ⅱ-4 静止した時間の建築

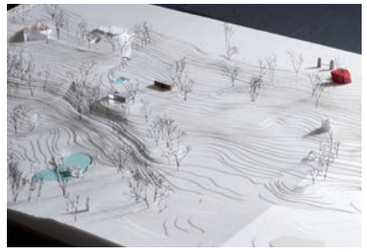
これはさっき伊礼さんも言っていたみたいに、時間が止まったように感じられる建築があるなと思うんです。それはどういうことかと言うと、変わらない建築、普遍的な建築ということなのかもしれません。歴史的な建築で言えば南仏のル・トロネ修道院ですね。もう使われていないからかもしれませんが「ここは時間が止まってる」と感じます。現代建築で言えば、エーロ・サーリネンのMITのチャペル（クレスゲ教会）がそうです。何度行っても変わらない、時間が止まっているように感じます。

写真で取り上げるのはルイス・カーンのソーク研究所ですね。ここを訪れると建築における時間というものを考えざるを得ません。キリコの絵のようであり、現代の建築ですが一種の神殿のようでもあります。時間に捧げられた建築というような感じがします。生物学の研究所ですが、それだけではない意味を建築が持ったという気がします。

Ⅱ-5 遊び時間の建築

建築で遊ぶことができるんだなと初めて思ったのがフィリップ・ジョンソンです。フィリップ・ジョンソンは建築で遊ぶことがすごく上手な人で、ニューケイナンにある自邸にはたくさんの遊びの建築があります。その中にリンカーン・カースタイン・タワーという、ただ登るだけの建物というか、塔のような建築があります。

写真はスタッフが作った模型です。一番上にジョンソンを立たせています。高さ８ｍほどの建物で、彼らがここでやりたかったのは最小限の寸法がどういう風になっているのかということで、人間が上れる段はどれぐらいなのか、くぐれる寸法はどれぐらいなのか、ずーっと辿っていけば、くぐったり、まわり込んだりしながら上へ上がっていけるんですね。そういうのを一種の遊び時間のなかで、スケールを味わうために彼らはつくったのだと思います。



もうひとつの写真は北海道の真狩村につくったパン屋の息子さんに頼まれてつくったツリーハウスです。ちょうど雪の時期に雪降ろしに行きまして私が雪落しをしてる、という遊び時間の建築です。

それから最後の一枚はおまけですが、フィリップ・ジョンソンの自邸を紹介します。ジョンソンがつくった遊び場といってもいいですね。広大な土地に莫大なお金をかけてつくった遊び場です。有名なガラスの家があり、レンガの家があり、絵画館があり、彫刻館があり、池の中のパヴィリオン、リンカーン・カースタイン・タワー、ゴーストハウス、スタディがあって最後にダ・モンスタというデジタルパヴィリオンを作って、ほぼ100歳まで生きて20世紀の建築を全部やった建築家です。機会があればぜひ見学してください。

パネラー03 | 栗生明 建築家

Ⅲ-1 村野藤吾邸

村野藤吾さんの自邸です。残念ながら阪神淡路大震災で倒壊してしまい現存していませんが、建築家の自邸というのはこういうものだと一番納得できる建物です。河内にあった民家を移築したものです。築100年ほどの民家をほとんど原形をとどめないほどに切り刻んで、40年間かけてつくり変え、変更し、付け加え、し続けた住宅です。

暖炉を付けて、煙突を付けて洋風なしつらえになっていたり、いろんなもののアッセンブルなんですね。先ほど、中村さんが“重ね合わせ”とおっしゃいましたが、時の重ね合わせだけではなく、いろんな手法の重ね合わせをし続けて、実験しながら、自分の設計に生かしていました。

次の写真は暖炉のあるところです。手前に民家にもともとあった太い梁が見えます。これだけはさすがの村野さんも手を付けられなかったようです。そして右側には、ぐにゃっと曲がった木があります。これは構造的には関係ないのですが意匠として取り込んでいます。

村野邸には、いたるところに本歌取（ほんかどり）のような部分があります。有名なのは残月亭の写しですね。村野さんはいろんなところでこの写しをしていますが、その中でも村野邸の残月亭はすばらしい。踏込み床になっているのですが、近寄ってみると床柱の位置を何度も変えているのがわかります。その時々の感覚で変えているんですね。さらに、障子の桟などもモンドリアンの絵画を連想させるようなデザインであったり。そのほかにも、濡れ縁が夕顔亭の写しであったり、照明器具を釣竿で吊るしたりと。そういう古今東西のデザインソースを持ち込んで、いろんなところに様々な工夫がなされています。

次の写真では壁に開けた開口にスジカイと貫が見えています。それをデザインの中に取り込んでいます。家具はもちろん村野さんデザインの家具ですが、絶妙なところに花を生けています。自身の生活のスタイルや趣向の変化、年齢に応じて建築をどんどんつくり変えていました。

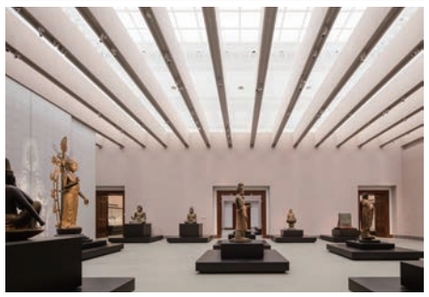
Ⅲ-2 横浜地方裁判所　特号法廷(陪審法廷)

写真は横浜地方裁判所　特号法廷の復元です。日本ではじめての陪審法廷であり、BC級戦争戦犯を裁いた軍事法廷としても使用された歴史的な事実のある法廷です。

当時の横浜地方裁判所の取壊しが決まった時に、なんとかこれだけは残せないかと思い、当時設計していた桐蔭学園のメモリアルアカデミーの中に組み込む提案をして実現したものです。

次の写真はメモリアルアカデミーです。この右のほうにブラックボックスのような箱があって、その中に再現しました。

もちろん、しっくいの部分のモールディングなどは新たに作りましたし、沖縄トラバーチンを使っていた部分には似たものを探しました。床の材料など当時は一般的に流通していても今は無い、という物もたくさんありましたので、似た材料を探して色合いもそろえて再現しました。ですから新しい建築の内側に、歴史的な時間をもう一回封じ込めて、現代に蘇らせたという一つの例ですね。



Ⅲ-3 奈良国立博物館

奈良の国立博物館です。明治の建築家の片山東熊の作品ですね。1894年ですから日清戦争の時に建てられました。ロケーションも含めてたいへん好きな建物です。西側から見る姿が引きが取れて、前に力がきているような感じでいいんですが博物館としては西側の入口というのは西日が入ってしまうので問題が多い。年に何回かは西日を遮りながら、この西入口を使用しますが基本的には東側の入口を使っています。

次の写真は東側の入口で、一枚目の写真のちょうど反対側にあたります。手前の入口の建物は吉村順三さんの設計ですね。この入口を含めた本館部分を私が改修設計をしました。

本館部分は重要文化財になっていますので、外壁、内壁、天井は変更できません。そういった条件の中で、免振の展示台を採用し、照明方法の変更をし、見学順路も変更をして新しくし、暗がりの中でスポットライトに浮かび上がるような展示をするのではなく、全体が明るく見渡せる展示空間にしました。柱のない空間にするために梁を大きくして天井をライトアップしています。入れ子のように新しい空間を内側につくって、見上げると片山東熊のデザインした天井が見える。

写真ではわかりづらいかもしれませんが、壁の色は桜鼠という日本の古代色にしています。吉野の桜の靄の中に仏像が点在しているようなイメージです。

展示されているものは飛鳥時代から鎌倉時代にかけてのもので、建物本体そのものは明治の建物、それに昭和の建築があって、さらに平成の技術を使って新しい建築をつくりました。それぞれの時代が積み重なった空間になりました。

パネラー04 | 古谷誠章 建築家

Ⅳ-1 マテーラ

南イタリアのマテーラです。今から30年近く前に初めて偶然に訪れ、大変衝撃を受けた街です。石の街と書いてあって不思議な雰囲気があったので、ふらっと入ったらこんな感じで、当時はほとんどゴーストタウンでした。

ここには旧石器時代から人が住んでいたと言われているのですが、以来延々と人が住み続け、人が住んできた地層が全部積み重なっています。下の方は洞窟住居、上の方には近代の一般的な建築、1000年以上の街の積み重ねがそのまま見えているという不思議な街です。

20世紀の中頃に凝灰岩のような柔らかい石が崩落し始め、住人の集団避難が始まりました。それで街がゴーストタウンのようになってしまったのですが、人が居なくなったとたんに街の崩壊が進行し始めたそうです。日本家屋でも空き家になると荒れるのが早いと言われますが、それは朽ちやすい木や竹や萱でできているからだろうと思っていました。けれども石の建築、石の街でも同じで、その中で暮らす人が居なくなった瞬間に、時間が止まって崩壊が始まるということを思い知りました。

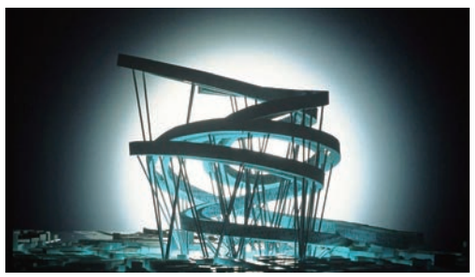
3年ぐらい前に訪れた時には、人の気配が呼び戻されていました。世界遺産に登録されたこともあって、人が戻ってきているようです。崩壊していた街に少し生気がみなぎっている感じがしました。

Ⅳ-2 Hyper Spiral Project 1996

20年以上前に行っていたプロジェクトの話です。日本建築センターから依頼をされて、将来1000メートル以上の超高層ビルが建つとしたらどんなビルのデザインが可能か。ということを検討していました。アメリカからはパオロ・ソレリ、ヨーロッパからはレム・コールハース、そして日本からは私が選ばれて国際シンポジウムを開催する時につくったプロジェクトです。ハイパー・スパイラル・プロジェクトという作品です。

この時、ソレリが提案した1000メートルを超えるタワーは、アリゾナの砂漠に建つ自給自足的なエコタワーでした。コールハースはタイのチャオプラヤー川にまたがるようマルチシャフトで何本もの連結超高層を提案していました。この提案には、年次計画的に成長していくようなことが盛り込まれていました。

当初私たちも同じことを考えていたんですが、だんだん成長していく1000メートルを超える超高層ビルを支えるためには、最初からそれを支えられる基礎がない限りできません。そこで私たちが考えた成長する超高層ビルがこれです。グルグルと渦巻のように延びていって、その都度新しく増えた荷重を新しい脚で支えていくというものです。その脚は既存の地下鉄の駅に



直結するように配置して、いずれ東京駅の上空1000メートルまで登っていくという計画を立てました。世界一を競うような超高層とは違ったスタンスで、将来成長しながら変化していけるようなビルディング技術、というふうに置き換えてみたらどうだろうかと考えました。

何百年かかるか見当もつかないような提案ですが、都市というものには最初に全体の最終形があるわけではなくて、延びて広がっていくこともあれば、収束していくこともあり、分かれていくこともある。そういう建築物が可能なのではないだろうか、空洞化した都心にもう一度立体的に都市を構成することができるのではないだろうか、という提案です。

IV-3 狐ヶ城の家

3つ目の話題です。私が初めてつくった住宅作品で、1990年に竣工した「狐ヶ城の家」です。

新建築の企画で10年、20年経った住宅がどう変わっているかという企画があって、この住宅を再取材しました。写真でもおわかりいただけると思いますが、竣工してから23年経ってもこの家あまり変わっていません。確かに物は増えていますが、ほんとんど変わらなかったんですね。どんな風に変わっているかというのが興味の的だったんですけれども、変わっていなくてがっかりされました。（それでも住宅特集には掲載されました）

そんな前段があったすぐあとに、ここのクライアントだった方の娘さんから外装のリニューアルの依頼を受けました。もとのとおりに塗装し直せばいいのかと思って準備していましたら、全然違う色にしたいという要望でした。それで、こんな風に若々しく変わりました。23年間変わらないでいてくれたおかげで、24年目に変わった家、というような感じでしょうか。新建築はこんな風になってから撮りたかったと思ったでしょうね。（笑）

IV-4 カステルヴェッキオ

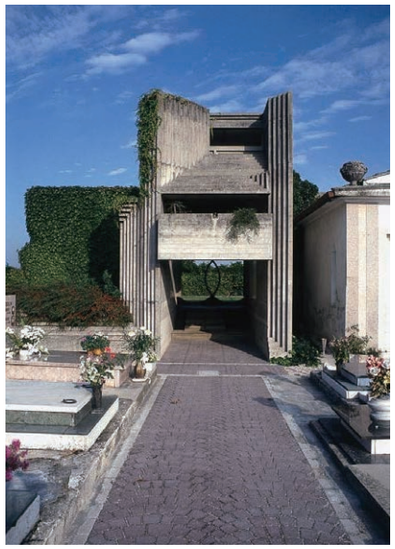
4つ目と5つ目は続いてる話題です。さきほど、好文さんがカルロ・スカルパのお話しをされましたが、私もスカルパを永らく研究していますのでその話をします。同じものが出てきますが、話題は少し違います。

私がお話ししたいのは、カステルヴェッキオの内部空間についてです。写真は入口のほうに立ったものです。奥に向かってお城の頃からのアーチが連続していますね。このアーチが連続しているおかげで、展示物はみんなアーチに隠れています。ですから、だんだん奥に向かって歩いて行かないと全部見えない。歩いて行くにしたがって次々と新しいものが見えてくるようになっています。つまり自分が動かないと、この中のものを見ることができない美術館なんですね。

さらに展示物を見てください。後を向いています。ここまで行って振り向かないと、この彫刻を見ることはできません。このスカルパの空間は、静かに佇んでいるように見えますが、来館者はこの中をクルリクルリと向きを変えながら、めぐり歩くことを自然に促されるんですね。一望して済ますことができないという意味で、この中には時間が織り込まれているように感じます。

この時間が織り込まれている感覚は、私はスカルパの生まれ育ったベネツィアの街が大きく関係していると思います。ベネツィアの街が同じように一望できない街で、全部自分で入って辿っていかないといけないようになっています。

最後に有名な部屋です。またこれも横を向いています。正対してこの像を見ようとすると壁の反対側にあるレリーフが目に入ってきて、それを見ようともう一度こっちを向くと、今自分が歩いてきた道を見返すことができる。そうやって、この建物の中をベネツィアの街の中を行くようにクルクルと回り込みながら歩いていく。そこには時間とともに物語性も感じます。



IV-5 ブリオン家の墓地

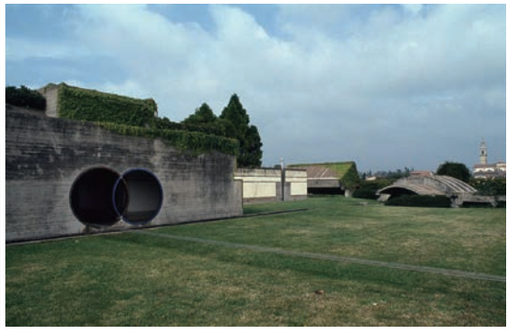
これも有名なブリオン家の墓地です。これは1990年頃の写真ですが。ご存知の方は、前に低く垂れ下った木があったのを憶えていらっしゃると思います。一度枯れてしまって、現在はまた新たに、似たように垂れ下がった木が植えられています。

スカルパは共同墓地の通路からこの墓地に入る時に、この中を、こうべを垂れてくぐり抜けて入ってくれるように、少し垂れ下った木を植えたそうです。永らく無かった木が最近植えられたということは、この建築があり続けることで、スカルパが語っていたことを思い出そうとする行為があったということで、つまり、建築自体が一種の記憶装置として新たな世代に、メッセージを伝えていくという働きをしているんだと思います。

そしてもうひとつ私が伝えたいテーマがあります。同じ時期、コンクリート打ち放しの外壁はこんな風に蔦に覆われていました。コンクリートも風化して黒ずんでいましたので、スカルパをよく知る人たちのあいだでは、もとのきれいな状態に戻したいと話していたようです。

でも私はちょっと違うのかもしれないと思っていました。スカルパは素材や材料の性質に非常に詳しいはずです。そのスカルパが何故、風化しやすいコンクリート打ち放しを選んだのかということを考えると、風化することを前提に考えたとしか思えないんですね。何代も先の将来、ブリオンさん本人のことを知らない世代になっているだろう、とスカルパが考えたとしたら…。つまり、経年劣化が進んだ頃には、ちょうど草にうずもれて、消えてしまってもいいんじゃないかと思っていたとしたら…。

もしかしたらスカルパは最後は土に戻ってしまうというようなところまで織り込んでいたんじゃないかなと思うんですよね。



パネラー05 | 江尻憲泰 構造家

V-1 清水寺

以前にもご紹介させていただいて、その時は小屋組のところを題材にしたのですが、今回は舞台の下のことについてお話しします。

右図下の写真はトレンチ調査の様子です。清水寺の本堂は、1000年ほど前に坂上田村麻呂が自宅を寄進してできたと伝えられていますが、トレンチ調査をした結果、6回ほど家事になっていることがわかりました。朽ちた跡がうっすらと黒く残っているんですね。そして、この斜面は実は地山ではなく版築によって地盤改良されたものなんです。火事になって朽ちるたびに、その上に盛土して版築で地盤改良を行って建て直されています。今回の耐震補強では、もう一回版築を行い地盤面の補強を行いました。版築の層には時間の積み重なりを感じます。

それと右図右上の写真ですが、よく伝統木造は金物を使っていないと解釈されていたりしますが、実はたくさん使っています。現在の建築でも使われているような金物の原形を見ることができます。写真では2つしか挙げていませんが、ひねり金物、カスガイ、その他にも、平金物であったり梁受け金物であったりと、現代につながっている様子を見ることができます。

V-2 現代の方丈庵

京都の下鴨神社で隈研吾さんと一緒にやらせていただいた作品で、現代の方丈庵をつくるとしたら、どんなものができるだろうかというプロジェクトです。

左図右下の写真は方丈庵を復元したものです。鴨長明の方丈庵というのは組立式なんですね。それで、現代の方丈庵として組み立てられるようにするには、どんな方法があるかというので、磁石を使ってみることにしました。

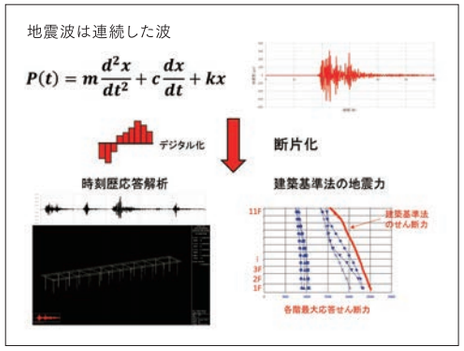
非常に磁力が強いネオジム磁石と、ETFEという透明な膜を使って折り畳んで丸めて持ち運びできるようにしました。3枚の透明な膜をグルグル巻いて、北山杉でつくられた骨格どおしを磁石で固定することによって構造体が完成するというもので、結局、“現代の方丈庵”というよりは、“未来の方丈庵”というような趣向になりました。

現在は下鴨神社に保存されていて、イベントの時などには組み立てられているそうです。

V-3 地震波

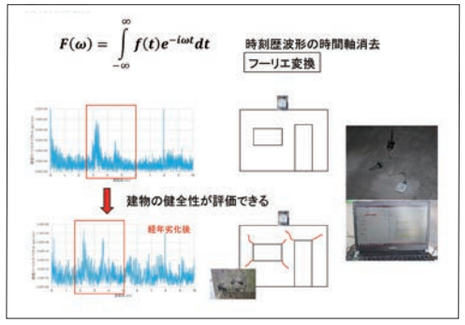
いきなりお勉強みたいな話ですみませんが、地震波についてお話しします。

構造は絶えず時間と闘っています。地震というのは力と時間の関係なんですね。スライドの左上に公式を出していますが、あまり構えないでイメージとして受け取ってください。地震力というのは連続した力が時間とともに変化するものとして捉えているんですが、実は私たちは連続したものは取り扱えません。ですから時間ごとの波を断片化して、コンピューター上でシミュレーションしながら設計を行っています。



建物は各時刻ごとにバラバラに地震力を受けます。例えば2階が0.5秒後の時に一番大きな力を受けたとします。でも1階では1秒後だったりします。最大の力を受ける時間は場所によってバラバラで、建築基準法の地震力は、そのバラバラな時間を寄せ集めてすべてを包含できるように定められています。すごく非合理的なのですが、その時間ごとで建物全体が持ちこたえればいいので、少し効率は悪くなりますが、そういうことになっています。よく考えてみると建築基準法も時間を切り出しているんだなと思います。

V-4 劣化・損傷



もうひとつお勉強みたいな話しをします。古い建物の劣化や損傷を判断するのに活用できるのですが、実は地球というか地面は常時、振動しています。その振動を計測して劣化度を判定するというものです。

スライドの右の写真のような加速度計を取付けて建物の微細振動を計測します。そうしますと先ほどの時刻暦応答のようなデータがとれるのですが、それをフーリエ変換をして時間軸をなくします。時間軸を角速度の指標に置き換えていくと実は劣化度がわかるのです。現在、だいぶ研究が進んできましたので、もうそろそろ実際に運用されるようになると思います。

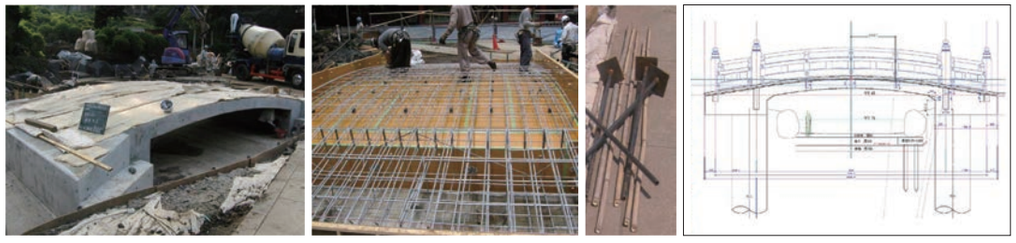
構造設計というのは常日頃から時間と密接につながっていて、時間をいじりながら計算をしています。

V-5 根津神社

根津神社に橋をつくった事例です。根津神社から1000年もつものをつくってほしいという要望があって1000年を目標にいろいろと考えました。

耐久性があって頑丈なものをつくらなければならないということで、ドイツのアウトバーンに倣って、スランプの小さな固いコンクリートを使ったり、打設後に叩いて締固めをしたりと、施工の手法なども参考にしました。他にもステンレスの鉄筋を使ったり、鋼管杭が腐食しないように地盤の補強を工夫したりもしています。

結果的には1000年というスケールでは計算ができなかったのですが、500年ぐらいはもつであろうと考えています。また橋の形状については、長い年月のあいだに万が一、杭と上部の橋がずれてしまっても、橋自体の形が保持できるようにアーチ型を採用しました。私の予想では、無理やり壊さない限りは1000年後も残っているんじゃないかなと思っています。



シンポジウムをふりかえって

古谷　少しお互いに感想や補足のご意見などをいただければと思います。

伊礼　私も時間について分類して、漏れのないように五つ取り上げたつもりだったんですが、中村さんの“気になる時間”っていうのは、ちょっとだけ待ち時間みたいな感じで、そういう短い時間をどうコンセプトとして切り込んでくるのかなっていうふうに思って、おもしろかったなと感じました。

中村　時間の建築というものを考える時に、あまりこう具体的じゃないところから発想してきて、具体的なところに落ちていくほうが考えやすいんではないかな、っていうふうに思いましたし、わりあい幅広くとらえることのできるテーマだったかなという気がしています。出題したときには、あまりそういうことを考えていなかったんですが、あとから思い返してみると、まぁ自画自賛なんですけれども、いいタイトルだったんじゃないかなというふうに思っていました（笑）。だから、みなさんの作品がどんなカタチで“時間の建築”というテーマに対して答えてくれるか、それを拝見するのをすごく楽しみにしています。

栗生　みなさんのスライドをたいへん興味深く見せていただきました。時が経って美しいというキーワードがありましたけれども、日本人は、時間を経て、朽ちてきて、あるいは傷んできて、逆にそれが価値になっていくっていう捉え方をわりとよくします。

お茶の世界ではこれが特に顕著で、茶器の作者は誰か、どういうお茶席で使われたか、どういうお客がきて、どんなお点前をしたかなどが記録に残っていますね。お茶碗が割れたとしても、金で継いだり銀で継いだりして、そして、それを景色として愛でる。あるいは、茶渋がついたのも価値として捉えていく。そういう感覚があると思うんです。

最近「つくろい」って言葉が死語になりつつあります。建築でもつくろい、手入れしていく建築ってやっぱり美しいと思うんですよね。今回の作品の中でもリフォームのものがありましたが、もとに戻しましたっていうのではなくて、現代の感覚がうまくそこに盛り込まれて、過去のおじいさんの時代のもの、お父さんの時代のものを引継ぎながら自分を織り込んでいくっていうような仕掛けがないと、おもしろくないかなと思います。

江尻　今日のみなさんのお話しを伺って、古い建物に新しいものを付加して、次の時代へつないでいく、というお話しがありましたけれども、私自身、重要文化財や世界遺産などの補強や改修の仕事をさせていただいていると、実は日本ではなかなかそれができなくて、そのまま、もとのとおりのまま、残さないきゃいけないっていう風潮があります。ですから、今お話ししていただいたようなことを、できればもっといろんな所でお話ししていただければなと思いました。

もうひとつ、“朽ちていく”ということについてですが、構造をやっているほうからすると、朽ちていくものに対して安全性を確保するということは相反することなんですね。それは非常に難しくて、実はあるプロジェクトで今それにチャレンジしているところなんですが、そのまま残しておくんだけれども安全性は確保しなければならない、ってこともこれからは必要なんだなと感じました。

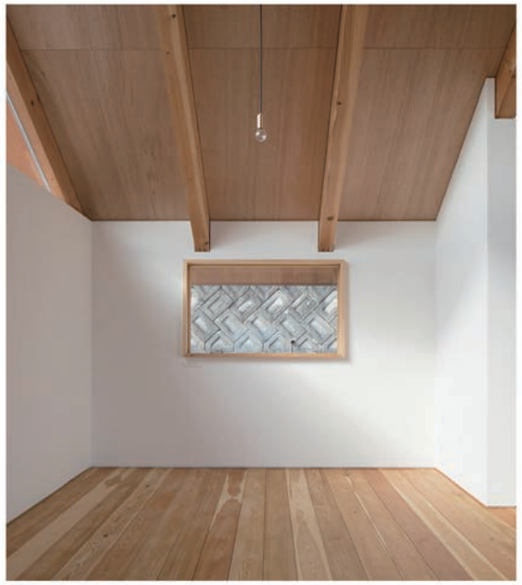
古谷　ありがとうございました。みなさんに簡単に印象をお話ししていただきました。また後半の公開審査会でも、いくつか話題が出てくるかなと思います。

私はやっぱりこっち側（中村、栗生、伊礼）のみなさんのは、なんとなく予想できたんですが、江尻先生のフーリエ変換は出てくると思ってなかったので、とても新鮮でした。建物は地震に持ちこたえることとか、あるいは経年劣化して性能が落ちてきても、もち続けなきゃならない。建築は時間という頸木（くびき）から逃れることはできないんだな、長短はあるにせよ時間の経過というものと切り離されることがないんだな、ということを改めて実感しました。

先ほどの1000年もつことの永続性という方向もあれば、一方で絶えず更新されていくことで、物質としては新陳代謝して変わっているんだけども、建築そのものは生きながらえていくという方向、そういう性質のものもある。ということがわかったような気がしました。

以上で前半のシンポジウムを終わります。

第8回 建築コンクール 受賞作品



変わらない景色

いつもそこにある景色
お隣の擁壁
数十年、時の流れとともにあった景色
そこにふと現れる時
擁壁の隙間から草が生え花をつける
カマキリがよじ上っていく
雨が降れば水の道が現れ
落ち葉が斜面を彩り
冬には雪が窪みにとどまっている
それは変わらないようにみえた景色
明日は、どんな世界を見るのだろう

最優秀賞　「変わらない景色」岩橋 翼

はじめて見たときはジャスパー・ジョーンズの絵画を壁に飾っているかのように思えた。これは近接する隣地の間地ブロック積み擁壁を窓枠で切り取って見せている住宅です。桜やモミジ、空や海といったものを借景としてピクチャーウィンドウの様な形で切り取って見せる手法は一般的であるが、隣地の擁壁をこれだけ大きな窓で切り取って見せることは普通はしない。軒の見せ方と窓枠の位置や大きさ、そして、そこに見える擁壁と水抜き穴の位置、これらが絶妙なバランスで構成されていて意識して擁壁を見せているように思える。何の変哲もない擁壁であるが、雨の日は水が流れたり、隙間に草が生えてきたり、カマキリがいたり、雪が降るとうっすらと白いラインがみえたり。微細な変化が刻々とあることを発見させられる。その微細で多様な変化を時間として捉えて、風景を切り取ると同時に、時間を切り取っている。実にシンプルな見せ方ですが、だからこそこんな切り口があったのかとショックを受けた作品です。

優秀賞

「じかんのかばん」田中南帆＋池上真梨歌

プライベート空間を持ち歩こうというアイディア。かばんの中には4種類の布と紐が入っていて、それを自分の好きなところへ持っていき、自分だけの空間を作り出すことができる。布がゆらぐことでがゆったりとした時間を感じさせてくれる。空間とともに自分の時間をどこかへ持っていくという考え方がおもしろく、その行為と時間に関係性があって、行為を時間として捉えているのが印象深い。空間を持ち運ぶのだけれど、それは時間を切り取っているということでもある。深読みかもしれないけれど、どこかへ持っていく移動の時間もつくりだしているといえる。時間を持ち歩くという感覚が素直なアイディアでおもしろい作品です。

「音とサクラの家」河西立雄

敷地の環境や地勢を紐解いて音のあり方から建築空間を計画した住宅。内部は細長いコンクリート空間となっており、音の流れる向きに木戸を設けて音の出入り口としている。開口部から入ってくる音や、傾斜地ならではの長いアプローチを歩く、といったことが時間を感じさせる。特に音ということでいえば、視覚的なものは一瞬でみることができるが、音は継続的に聞かなければそれを解することができないという点で、音に時間を感じること、時間がなければ成立しないこと、に着目した点に脱帽した。耳を傾けるという時間がいい。また既存の大きな桜を残していて、桜の季節感、生育などを丁寧に表現しており樹木の存在にも時間を託している。そして桜には花だけではなく幹があり、その黒い幹と住宅の黒い外装とが調和していて完成度の高いデザインです。

「湘南キリスト教会」保坂猛

季節ごとの光の入り方を検討して計画されたプロテスタントのキリスト教会。礼拝の時間帯には直射日光ではなく天空光のやわらかな光が好ましいため、一年を通して礼拝の時間には天空光が入るように的確に光の角度をコントロールしている。礼拝の時間以外の祈りの時間には直射日光が入り、祈りの空間性を強める。まさに建築により時間を切り取っているといえる。建物配置の角度やトップライトの位置などのスタディを年間を通して行っていて、刻々と変化する太陽光の角度を入念に検討して教会の礼拝の時間にちゃんと照準を合わせるというのはすごい努力だと思います。緻密に計画されており実作として素晴らしい教会です。

審査員賞

中村好文賞「岩」小薮佳代

波で変化していく時間とか、そこを空間、建築として捉えている。

永い時間のなかでカタチを変えていく、岩というものに着目したところが面白い。建築でないもので表現した点に虚を突かれた気がした。写真の表現もよく、時間を感じるものになっていると思います。

栗生明賞「私立大室美術館」大室佑介／大室アトリエ

この私立美術館の話は聞いたことはあったが実物をはじめて知った。

犬の首輪の工場、倉庫、店舗、と時期をずらしてつくり、場を拾いあげながらミュージアムショップや展示スペースなど、いろんな使い方をしている。

そこにあるものを器として受け取り、時間というものを読み取り、できることを最小限で手を加え、効率のよい使い方を発見しながら活用している。美術園といってもよいかもしれません。

古谷誠章賞「風景への参道」オレクトロニカ

「時間を積み重ねた、小さな町の風景」というタイトルがついていて、町を眺められる物見台のようなデザイン。このオブジェの方に焦点があたりがちだが、そうでなくて自分達の暮らす町がだんだん変化していく、というようなことをここに登ってみると気がつく。

身の回りの変化はあまりに身近すぎて、非常に動的な変化でないと気付かない。知らない間に町は変わってしまっていたりするので、それをあそこに行くと気付くことができるのだろう。右上写真の感じがいいです。

伊礼智賞「洗濯路地」清水千恵

ランドリーで待っている時間に着目してそれを広げているのが面白い。

馬蹄形の建物をつくってその中にコインランドリーをならべている。Uの字型の空間にしてしかも凸面の方に座って並んでいるから、少しプライベートな時間を持てる。

時間には、ひとりの時間と他者との関係で成立する時間があるが、これはランドリーでのひとりの時間をポジティブに捉えて、そこに時間を発見しようとしている点が印象的でした。

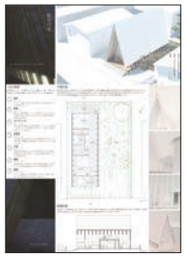
江尻憲泰賞「Bottle Cloud / Crowd 」若林拓哉　永井雅子　根岸龍介

ペットボトルを5000本使って組積造を作ったインスタレーション。

中心部分はペットボトルが階段状になっていて人が乗れるようになっているとのこと。誰でも積み重ねられて、誰でも関われるような雰囲気がある。

全体のデザインは決めずに即興的に進めたとのことですが、ペットボトルを拾い集めながらつくった感じがします。

佳作



「盲目の家」
崎山涼

目の不自由なお母さんのために計画した、香りや光を感じる家。視覚的な情報が制限された中で、空間を時間に置き換えて感じられるような今回のテーマにあった提案です。

「東小松川デイサービス」
伊藤潤一

住宅的なスケールにボリュームを分解し、自由に場所や時間を選べる。街に近づきつつ違和感無く街とつながる高齢者と街行く人たちとの時間の共有が感じられる計画です。

「屋台との放浪の旅」
三浦悠希

いろいろな場所で屋台を開く。異なる価値観や異なる人生を表現している。自分の時間を運ぶ提案です。

「大黒柱と小さな床の都市型住居」
鈴木竜太＋田中匡美／サンゴデザイン

樹齢110年の檜の歴史を大胆に使った住宅の実作。

「沼須人形稽古場 薪水書窓庵」
鈴木竜太＋田中匡美／サンゴデザイン

伝統芸能という地域の歴史を楽団が買い取り、地域に開放し活用する計画。土間と舞台と地域芸能が次世代に繋げて行く建築です。

あとがき

「時間の建築」時間は人にとって、正確であれば便利であると思いきや、曖昧であったほうが助かることもあります。正確な時計が無い方がルーズにわがままに暮らせるのに、と思うのは私だけでは無いでしょう。

シンポジウムでは、5人の建築家が広い視点で「時」を語ってくれました。過去から今へ受け継がれる建築、未来へ向かう建築、更には、時間が気になったり、時間を溜めたりする建築。そして、時間とともに朽ちていくなど、多くのテーマが見えてきました。

全国から82作品が集まり、時間を読み解く立ち位置で、作品の見え方が変わるとても面白いテーマではなかったでしょうか。このように、人や建築、更にはこの世の物資にも大きな影響を持つ「時間」を議論することができてとても有意義なコンクールとなりました。

最後に、このような企画に賛同いただき、支えてくださる協賛企業の皆さまに感謝いたします。また、例年、難しいテーマを仕切ってくださる審査員の建築家の方々にも御礼申し上げます。

第9回の建築コンクールの開催もすでに決まっております。テーマは「つくろう建築」今回は秋の開催となります。また、会場で皆さまにお会い出来ることを楽しみにしています。

（公社）愛知建築士会名古屋北支部長
浅井裕雄

後援

愛知県、名古屋市、(株)中日新聞社、(公社)愛知建築士会、(公社)日本建築士会連合会、(公社)愛知建築士事務所協会、(公社)日本建築家協会東海支部愛知地域会、(株)中部経済新聞社、(公財)名古屋まちづくり公社名古屋都市センター

協賛企業

旭化成建材株式会社、一般財団法人愛知県建築住宅センター、株式会社確認サービス、株式会社ＣＩ東海、株式会社インターテック、ＯＭソーラー株式会社、株式会社タニタハウジングウエア 、株式会社ＴＪＭデザインキッチンハウス名古屋店、株式会社ハイム、株式会社マツナガ 、ユダ木工株式会社 、株式会社サンキテック、アールド株式会社、イリエ製作所、オスモ＆エーデル株式会社、株式会社ユニオン、株式会社ユニソン、株式会社ワセ田ガス、岐阜アルコ株式会社、株式会社総合資格名古屋支店、gallery yamahon

テーマ

時間の建築

製作・発行

公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部

https://www.asa758kita.jp/　　http://kenchiku-concours-758n.org/

第8回建築コンクール「時間の建築」　2017年10月発行　300円（税込）